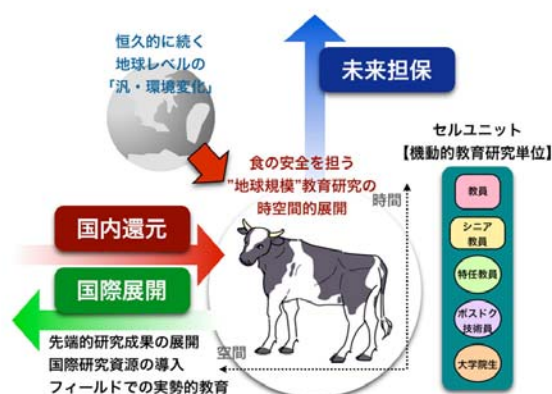


機 関 名	帯広畜産大学
拠点のプログラム名称	「アニマル・グローバル・ヘルス」開拓拠点
中核となる専攻等名	大学院畜産学研究科畜産衛生学専攻
事業推進担当者	(拠点リーダー) 嘉糠 洋陸 教授 外 24 名

〔拠点形成の目的〕

近年、BSEや鳥インフルエンザの地球規模での流行や頻出する食品偽装事件など、食品を巡る諸問題が連続し、「**食の安全確保**」は**日本のみならず世界レベルの最重要事項**のひとつとなっている。これらの問題は感染症と直結していることがその特徴であること、これらは全て動物由来感染症であり、農畜産物を介して人に伝播する可能性が高いこと、アジアやアフリカの開発途上国を中心とした食肉生産のグローバル化が進められていることなどから、畜産衛生分野における食の安全への関心が急速に高まっている。そのために畜産・獣医学領域に新たな複合的学術基盤を構築し、感染症だけではなく**地球規模の畜産衛生分野の展開に携わることができ、国際的に卓越した専門家の育成体制を確立**することが急務である。特に、畜産衛生学分野における先端的研究の国際的展開および国内外を問わず活躍できる若手研究者・技術者の急激な需要増加として反映されている。そのような背景から、畜産衛生学の『国内』から『国外』そして『未来』に至る時空間的展開を指向した**畜産衛生版「アニマル・グローバル・ヘルス」(AGH: Animal Global Health/Hygiene)の学問的擁立**は、本学の存在意義の中に必然の流れとして生まれるに至った。本拠点形成の目的はこの一点にあり、新たな研究領域の開拓と大学院重点化単科大学としての本学の中長期目標とを重ね合わせ、全学一体となった国際教育研究拠点形成を目指す。

本拠点は、獣医学・畜産科学両領域の有機的な融合による新たな教育研究基盤をベースに、獣医・畜産系大学では唯一の共同利用・共同研究拠点である原虫病研究センター、日本に先駆けて畜産衛生における「食の安全」専門機関として創設された大動物特殊疾病研究センター(平成22年4月より動物・食品衛生研究センターと名称変更)、および21世紀COEプログラムによりその設置が促進された畜産衛生学専門の大学院博士課程をその足場として据え、食の安全確保に貢献しうる、世界に伍する能力を持った専門家を養成を実施する。これにより、世界の中でただひとつしか存在しない、畜産衛生版「アニマル・グローバル・ヘルス」に特化した国際的教育研究機関への飛躍的發展を目指す。



畜産衛生特化型「アニマル・グローバル・ヘルス」拠点

〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕

本学は我が国で唯一の獣医畜産系単科大学として、農畜産に関する基盤研究実績にもとづく畜産衛生に特化した教育研究実績を基盤として、**世界最高水準を睨んだ畜産衛生特化型「アニマル・グローバル・ヘルス」の国際的拠点(AGH拠点)重点化**を目指す。本拠点は、獣医・畜産融合の概念のもとに構築された**総計23の「セルユニット(機動的な教育研究単位)」**を軸として展開中である。このセルユニットは教員・シニアプロフェッサー・若手研究者(時限付き助教)・ポストドク研究員・大学院生等で構成される少人数の教育研究集団であり、機動的かつ柔軟性の高い組織単位である。このセルユニットの機動性を生かし、**①高度専門研究能力②国際総合マネジメント能力③高い倫理感を含めたリーダーシップ育成**の“三位一体型”戦略的人材育成を展開している。本AGH拠点は、「アニマル・グローバル・ヘルス」を【動物衛生】および【環境衛生】、さらに拠点開始後に設置された【衛生倫理】の三つのウィンドウから捉え、地球規模の視野に立脚し研究推進することにより、新しい学際領域の開拓を実行している。セルユニットを基盤として、アジア・アフリカ諸国における先端的研究成果の展開と、それらの地域から国際研究資源(人的・物的)の導入を実施し、セルユニットによる研究実施過程を“高度専門教育の場”として取扱う。

このメインスキームの下、これまでの人材育成活動として、ベトナム・スリランカ・シリア・ミャンマー・フィリピン・南アフリカ・サモア・ブルキナファソなどアジア・アフリカ地域開発途上国を含む**計20ヶ国**において、**セルユニット活動としてのべ42回(参加大学院生のべ29名)**、国際共同研究を通じた研究現場および畜産生産現場において教育研究活動を展開することにより、グローバル化する畜産衛生学分野の理解を深め、実践的な研究開発能力と国際性の習得をはかることに成功した。また研究活動の面では、アジア・アフリカ諸国における先端的研究成果の展開へ向けた戦略的準備と、それらの地域から導入された国際研究資源(共同研究者、研究試料、実地経験等)を活用した研究成果を数多く得た。これらの**圧倒的なフィールド展開活動に支えられた本拠点活動**により、畜産衛生学領域から新たに生み出された世界オンリーワンの「アニマル・グローバル・ヘルス」教育研究拠点の構築・実質化が強く推進されている。

(総括評価)

このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の適切な変更が必要と判断される。

(コメント)

単科大学の特徴を活かした「専門店型」の拠点形成を目指す本拠点は、全学的に本拠点形成計画を支援する体制が敷かれ、セルユニットという機動的な体制を中心に運営されており、分野横断的な学術論文が数多く公表されるなどの成果を収めてきた。しかし、本大学において過去に研究費の不適切な処理が認められたことに伴い、本プログラムの事業推進担当者9名、セルユニット分担者2名が平成23年1月より拠点形成から除外されたことなどが本拠点形成計画全体に及ぼす影響は少なくないものと判断され、当初目的の達成のためには、全学をあげて事業の改善・推進に取り組む必要がある。

人材育成面については、セルユニットの教育上の位置付けが十分に明確ではないことから、拠点を形成している専攻・センターとの関係を含め、そのあり方について更に検討する必要がある。研究活動面については、フィールド活動を基盤としたセルユニットの研究上の意義と効果が高いことは評価できる。

本拠点ならではの具体的な研究成果を明示的に示すことが出来るよう、研究のアウトカムについて更に検討する必要がある。

また、事業推進担当者9名の離脱等に伴う、動物衛生プログラムをはじめとするセルユニットの再編・統合についても、自主的に再検討を行うことが望ましい。

補助金の使用については、不正使用が再発することのないよう、事務組織や監査体制の整備に注力することが望まれる。また、今後は外部資金も活用しつつ海外活動や教育活動に重点配分する必要がある。

今後の展望については、欧米の大学との連携も視野に入れながら、この分野の国際展開を一層図り、「アニマル・グローバル・ヘルス」の構築を目指すことが期待される。